

## カリスマ地理教師から経営者へ

—守屋荒美雄に見る明治・大正期の教育イノベーション—

伊藤 智章 (静岡県立裾野高等学校教諭)

### 【講演要旨】

講演者は、1973 年生まれ。守屋荒美雄氏とは 101 歳違いの現役高校教師です。

教員の傍ら、実践報告論文や教科書会社の冊子にコラムを執筆していた 2010 年、帝国書院の創業者、守屋荒美雄 (もりやすさびお) の生涯に関心を持ち、フィールドワークを交えたコラムを月刊「地理」誌で担当しました。(2011 年 4 月号～7 月号)。

明治 5 年、守屋荒美雄 (幼名：荒三) は、倉敷郊外 (西阿知村) に生まれました。勉強好きだった少年は、村でただ一人、隣村の高等小学校に進みますが、経済的な理由から上級学校への進学を断念し、試験で教員免許を取得して母校の臨時教員になりました。

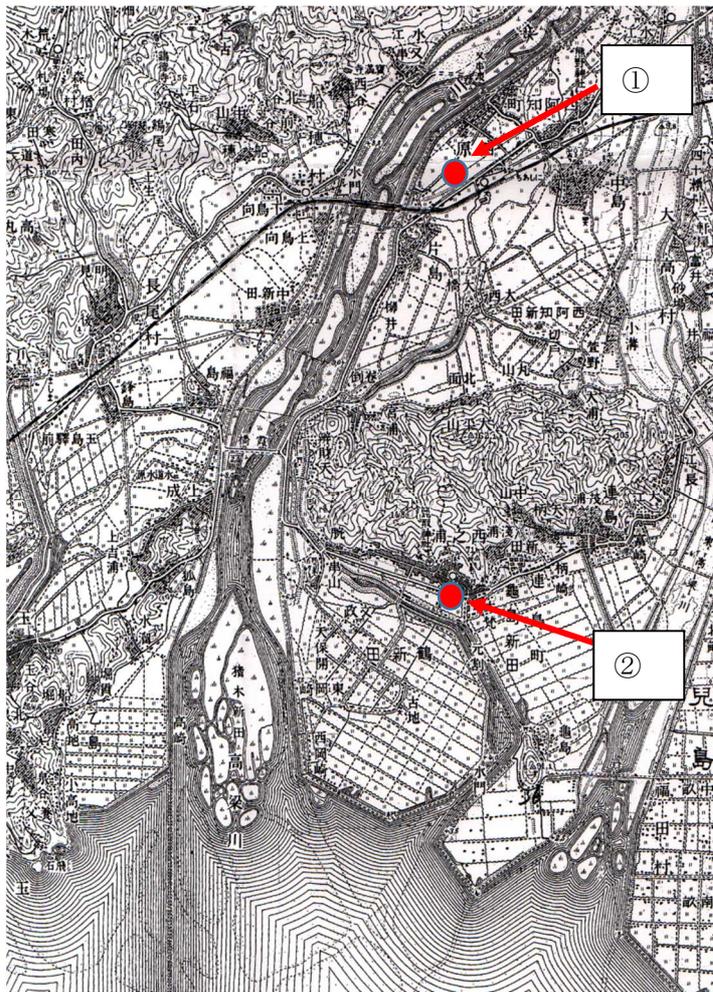
その後、守屋は 25 歳で上京し、高等文官試験 (現在の国家公務員 I 種) 試験を受験して官僚を目指します。その際、浪人生活の糧として、小学校の臨時教員になりますが、より実入りがよい仕事をとということで、中学校教員資格試験 (文検) を受験します。もともと数学が得意だった守屋ですが、受験に際して選んだのは「地理」でした。

合格後、青森県の師範学校を経て東京の私立中学の教師になった守屋ですが、教員生活の傍ら、高等文官試験の勉強に時間を費やします。その際、受験仲間と共同で「講義録」(大学教授の講義を基に作った受験参考書) を出版して評判をとります。市場のニーズをつかみ、自ら創作して世に送り出す彼のマーケティング感覚は、ここで培われたのかもしれない。

28 歳。結婚を機に教育の世界に生きることを決めた守屋は、これまでの経験を生かし、独自の教材を発表して注目を集めます。出版社から依頼を受けて 34 歳で初めて教科書を執筆すると大ヒット。気鋭の著作者としての名が広まりましたが、授業にも情熱を燃やし、教室から教室へ嬉々として飛び回る日々だったようです。しかし明治 44 年、彼は働き盛りの 40 歳で教師を辞め、執筆に専念する道を選びました。

講演では、守屋の 40 代に焦点を当てます。筆一本で身をたてる自負と不安、現場を離れたからこそ見えてきた明治末期の教育界の問題点、病気の妻の看護と育児。そして 45 歳で決断した「起業」という全く新たな挑戦・・・40 代の守屋は、その中で大作を著し、革新的な教材を作り、市場を開拓して行きます。一方で、「文検」の受験生や、彼を頼って来る郷里の書生の世話にも熱心に取り組みました。夕食後、書生たちがかわす青臭い議論に、岡山弁丸出しで加わるのが何よりの楽しみだったようです。

今、日本の教育は大きな転換点を迎えています。教師は多忙感にさいなまれ、夢や野心を持たない若者が増えています。生涯を地理教育にささげた「教育起業家」から得られるヒントは多いと思います。特別展を楽しむ一助にいただければ幸いです。



**図1 明治大正期の倉敷市西部**

村で唯一高等小学校に進んだ守屋荒美雄（幼名：荒三）は西阿知町西原（地図中の(1)）から西浦町（地図中の(2)）まで片道2里（8km）の道を歩いて往復した。



上：写真1 西阿知小学校の守屋荒美雄像  
下：写真2 帝国書院本社に所蔵された守屋荒美雄の著作

守屋は単著の教科書だけで200冊以上、他に地図帳や教員向け雑誌の編集を精力的に手掛けた。



**写真3 復元された旧新橋駅ホームと駅舎**

守屋が上京した当時、東京駅はまだなかった。郷里での小学校教師を辞め、官僚を志した守屋は25歳で上京し中学校教員を経て起業後するも52歳まで帰省することはなかった。

**写真4・5 教員時代の守屋**

左：28歳（明治32年）  
右：36歳（明治40年）  
獨逸協会中学校に勤務した。